

## 黄八丈 暮らしのなかの機織り、その変遷

Changes of the *Kihachijo* weaving in life:  
With the life documents of the weavers in the Island of Hachijo

中村実央 Mio NAKAMURA

あるひとつのモノをめぐる、そのモノと関わる人々の暮らし、地域や社会的背景を探ること、これは筆者が持ち続けてきたテーマである。また、消えていくかもしれないモノづくりの現場に足を運び、「今、聞かなければ」という危機感もある。

そういった思いをふまえ、本研究では八丈島(東京都伊豆諸島)で生産されてきた絹織物「黄八丈」をとりあげる。黄八丈は主に農家の女性の手によって副業として織られてきた。それゆえ、他の生業との関わりが大きなものであると考えられる。生産の中心である檜立地区でフィールドワークを行ない、織り手の内面にある暮らしの記憶や感情など、書き残しておかなければ消えてしまうであろう、細々とした事柄を書き記すことを試みる。

語りによる資料を生かす視点で、聞き書きという形をとり入れる。語りをめぐっては特にバイアスの問題などが指摘されるが、それらに留意しつつも、語りのなかに描き出される暮らしなり社会なりを考えることは重要だ、と筆者は考える。

第一部では黄八丈を概観した後、明治以降、聞き書きの織り手たち(大正末期～昭和一桁代生まれ)が生きてきた時代の絹織物の生産をたどる。

大正期半ばから昭和初期にかけて、他の産業への転向や、経済恐慌の影響などから黄八丈の生産は低迷した。昭和四年(1929)に底をつけて以降、十年ほどは一時的に盛り上がりを見せた。この頃は織り手たちの少女時代にあたる。

黄八丈の諸文献では、第二次大戦中機織りは皆無になったとされているが、自家用と軍人に売る程度には織られていたことが、語りからわかった。

終戦後もしばらく生産は下火が続いた。当時の主要な産業は炭焼き、乳牛の飼育、養蚕であった。昭和三十年(1955)頃にはフェニックス・ロベレニーを主とした花卉園芸が盛んになった。織り手たちの家でも多くは栽培を始めており、切り葉を切りながら、並行して機を織った人もいた。

昭和三十年代半ば頃から八丈島は観光地として賑わい、黄八丈は土産物という形で復興した。

昭和四十九年(1974)黄八丈織物協同組合が設立されたが、五十年代観光のピークを過ぎ、土産物

としての需要は減った。昭和五十二年(1977)年に国から伝統的工芸品の指定を受け、これをアピールする形で生産販売を続けてきた。だが組合員の高齢化がすすみ、技術の継承は厳しい状況にある。

第二部は織り手と家族の生活史を、八人の聞き書きから構成する。筆者は話を聞いて、この世代の織り手たちの多くにとって機織りが収入を得る手段としていかに大切なものだったか、そして「機織りで稼いできた」という自負を感じた。

語りによって、織り手が時代の流れと各々の事情に沿って、機織りと向き合い、ときには離れ、暮らしてきた様子が窺えたのではないかと思う。そして筆者なりに次のように整理した。

**どのような家で織るか** 機織りの現金収入が必要な家で織った。特に収入を得る手段が他にある場合には、機織りには頼らなかった。

**誰が織るか** 織る家では女性の中でも役割分担がある。母や祖母は下準備にまわる。姉妹では、織り専門の人、織らずに家事を引き受ける人などがいた。若い世代では、覚え始める時期が戦争と重なったり、勤めたりして機織りはしなくなった。

**いつ織るか** 人生の要所要所で起きる出来事(結婚・出産・夫の死や病氣など)が、暮らしに影響を与え、家計の状況も変化する。機を織るかどうかも関わってくる。

**織る場所と時間** 機織りは家で、時間の融通を利かせてながらできる。黄八丈に関しては、このことが、性別分業の大きな理由として考えられる。

副業として織られてきた黄八丈ゆえに、需要の動向だけでなく、他の生業の盛衰とも密接に関わりながら、変遷を経てきた(第一部)。また、家庭においても個々の事情で織るかどうかが、どの位織るかが変わった(第二部)。八丈島の暮らしのなかで、機織りはそれを取りまく様々な事柄と有機的な結びつきをしながら、存在してきたと言える。

機織りは現金収入が必要な場合には沢山織るが、他に手段があれば、そちらに頼ることになる。年老いても続けていけるが、労力に見合わない厳しい仕事であることも事実であろう。生活のために機織りが力を発揮する時代は終わりつつある。